
† DEATH GAME †

ヨシタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†DEATH GAME†

【Nコード】

N7134M

【作者名】

ヨシタカ

【あらすじ】

DEATH GAMEそれは、命をかけた死のゲームだった……

みんなを守るために、俺達は戦う！

プロローグ（前書き）

未熟ですが、よろしくお願いします。

ブローグ

DEATH GAMEそれは、命をかけた死のゲームだった……

ある施設のボロボロのベッドで一人の青年が目を覚ました。

「痛っ！」

ベットは、硬くとても痛かった。

青年は、周りを見渡し、声を上げた。

「ここはどこだ？ 何で俺はこんな所に居るんだ？」

青年の首には、首輪が付けてあった。

「な、何で首輪が付いてるんだ？」

そして青年は自分の携帯を見る。

そこには、こんな文字が表示されていた。

「ようこそ、ハ暁 ヨシタカ様
H GAMEの舞台へ……」 殺し合いのゲーム、DEATH

そこから物語は、始まった……

プロローグ（後書き）

プロローグは短いです。

第一章 死の目撃（前書き）

この話からが本番です。

第一章 死の目撃

1階 部屋A

青年……暁 ヨシタカは、文章を見た。

「なんだこれ？ 何かの冗談か？
さつきまで一緒に居たはずの奏はどこに行ったんだ？」

奏……ヨシタカの彼女

携帯の文章には、続きがあつた。

「DEATH GAMEとは、人々がこの施設から抜け出すために
行つ、醜い争いです。

首輪はルールを破った時に爆発し、死の罰を与えます。

ルールは施設の壁に張っており、1階に1つなので、全ての階に行
かないと全てのルールを把握する事は出来ない。

貴方の称号は、Aです。

貴方が施設を脱出する為の条件

Zの称号を持つ者を殺す。

それではゲームスタートです。」

「こんな悪戯初めてだ。誰だよもう」

ヨシタカは、ドアを開け廊下に出た。

1階 通路 A

数メートル歩いたら、壁にルールが書いてあった。

「ルール1

このゲームから抜ける事は、絶対に出来ない。

このゲームの情報は、メールで届けられる。

以下の事をした場合ゲームから抜けようとした事になり、罰を与える。

- ・ドメイン指定でメールの受信を拒否する。
- ・携帯を壊す。

尚、充電は自動で行われる。」

ヨシタ力はこれを読んだ後、悲鳴を聞いた。

「ぎiiiiiiiiいあー！。誰か助けてくれー！」

ヨシタ力は、声のした方に走っていく。

1階 通路G

声のした場所に着いたヨシタ力は、胃の中のものを全て吐き出し、倒れた。

そこにあつた物は……

頭部と体が離れている死体だった。

1階 部屋Ⅰ

ヨシタカは、さっき居た所とは別の場所で目を覚ました。

「知弦さーん、真儀瑠先生ー。さっきの人が目を覚ましましたよ」

ヨシタカが目を覚ました先には、4人の美少女と1人の美人と1人の青年が居た。

「ここは、どこだ？ 君達は誰？」

「俺は、ハ杉崎 鍵ヾだ。で、そこに居る黒髪の人がハ紅葉 知弦ヾさんで、

そこに居るロリの人がハ桜野 くりむヾ会長で、そこに居る、長い髪をまとめたツインテールの人が、ハ椎名 深夏ヾで、

そこに居る、色素の薄いストレートヘアの人が「椎名 真冬」ちゃんでそこに居る、暇そうにしてる人が、「真儀瑠 紗鳥」先生だよ。君は？」

「ちょっと待つて。杉崎。何で私だけ、紹介がロリの人なのよ。おかしいじゃない」

「杉崎！ 私は、暇そうになんかしてないぞ」

「皆さんの特徴を正確に表したつもりですけど、何か違いましたか？」

『違うよ（ぞ）』

そこで、ヨシタカが申し訳なさそうに手を上げた。

「発言しても良いですか？」

『どつぞどつぞ』

「えっと、俺は暁ヨシタカです。確か、倒れたはずですけど、どうしてここに？」

「私達がここに運んできたのよ。」

「皆さん、よく耐えられましたね。あの首がぶっ飛んでる人を見て」

「私とキー君と真儀瑠先生だけで見たのよ。他のメンバーは、ここに待機させて」

「キー君？」

「鍵って書いて、ケンって読むから、キー君。」

「なるほど。」

「ねえ、あの人がどうしてあんな事になっていたのか知らない？」

「えっと携帯の文章は、見ました？」

「ええ、見たわ」

「そこに書いてあったルールの事なんですけど、廊下にルールの1が書いてあったんです。」

ヨシタカはルール1の内容を話した。

「あの人の持っていた携帯は、折れていました。だから……」

「あの文章を見た時、私は、冗談かと思ったわ。でも……」

この重くなった空気を換えるためなのか、杉崎が喋り出した。

「ヨシタカ、俺のハーレムメンバーの名前、覚えてくれたか？」

「ハーレム？」

「俺の美少女ハーレムさ。俺達は愛し合って、ぐはっ」

「鍵、いい加減な言うな」

深夏に鍵は殴られていた。

「えっと、杉崎、会長、知弦さん、深夏、真冬ちゃん、真儀瑠先生だろ」

「あら、よく君は、自分から見て会長や先生じゃないのに会長、真儀瑠先生って呼ぶのね」

「よく君？」

「貴方の事よ」

「私は、ヨシタカって呼ぶわ」

「アタシもヨシタカって呼ぶぜ」

「じゃあ真冬は、暁先輩って呼びますね」

「私は暁だな」

こうして7人は数十分間、駄弁っていた。

だが、そこにメールが送られてくる。

「出目川 太司 ルールを破ったため、爆死。

今から5時間後、1階を封鎖する。詳しい事は、2階のルール2に書いてある。

地図は、携帯のアプリにある。

ではDEATH GAME再開!」

t o b e c o n t i n u e d

第一章 死の目撃（後書き）

暁 ヨシタカ 髪の色 青色

ちなみに真冬ちゃんの男性恐怖症はヨシタカに対して発動しません。

第二章 神極（前書き）

軽音部が出ます。

第二章 神極

「とりあえず、2階に行こうか」

「そうね。今、アプリで地図を見たんだけど、自分達がどこに居るのか分からないわ」

「とりあえず、歩いて確かめよう。俺も地図を見たんだけど上の階は、構造が違う部分があるな」

「おそらく、このゲームの主催者に関係している人が居ると思います」

「おっし、そこまで行って主催者をぶったおそうぜ」

ヨシタ力達は、部屋を出た。

1階 通路F

「この形は、やっぱり。今俺たちが居るのは、1階通路F ですね。まず、近い階段に行ってみましょう」

1階 階段B

ヨシタ力達が行った階段は封鎖されていた。

「この地図に書いてある階段に×印が付いている階段は封鎖されているみたいですね」

「じゃあ唯一×印が付いていない階段に行くか」

1階 宝具の間

「かなり広いところに来ましたね」

「ああ、地図で見ると1階の中心みたいだ」

「ねえ見てあれ。部屋の中心に大理石が置いてあって、そこに大きな剣が刺さっているわ」

「行ってみよう」

「何だ、これ？」

「とりあえず、引き抜いてみましょう」

杉崎が大理石から大剣を引き抜いた。

そこにメールが送られてきた。

「今、一人の者が宝具を手に入りました。

宝具とは、1階に1つ有る特別な武器の事です。

宝具の中には、ごく稀に強力な「神極」と呼ばれる物も入っています。

ではDEATH GAME再開！」

「宝具ってこれの事かなあ」

「おそらくね。あつ見て大理石に何か彫ってあるわ」

大理石にはこのような事が彫ってあった。

神極 エレメンタル・ブレード

「これが神極なのね」

「とりあえず、階段まで進みましょう。」

大剣は、杉崎が持ちヨシタ力達は階段へ向かった。

1階 通路M

一番後ろを歩いていたヨシタ力に知弦が小声で話しかけてきた。

「ねえ、よう君。自分が脱出するための条件見た？」

「ええ、見ましたよ」

「それって、誰かを殺せとかじゃなかった？」

「そうでした。もちろん、そんな事しませんけどね。」

「よう君以外も、そうゆう条件があるなら一箇所しかない階段で待ち伏せしていないかしら？」

「その予感、外れて欲しいですね」

「ええ」

だが知弦の予感は的中する事になる。

1階 階段A

「着きましたね。早く上りましょう」

その時だった。会長の後ろに誰かが現れたのは。

「アカちゃん、危ない！」

知弦が言った時には、その男が持っていた鉄バットを振り下ろしていた。

「うおおおおおお！」

「うらあああ！」

ヨシタ力がバットに向かって回し蹴りをして、バットを粉碎し、杉崎が男に向かって、真正面から全力の右ストレートを放った。

「はあ！」

男は杉崎の右ストレートを左手で止めた。

「お前は誰だ！」

「俺か。俺はグレイ。グレイ・G・カルネスだ」

「なぜこんな事を」

「俺の脱出するための条件が、それに関係してたからだよ。またいつか会うかもな。じゃな」

グレイは、ダッシュで階段を上っていった。

「大丈夫か、会長」

「うん。二人ともありがとう。ヨシタカ、鉄バットを蹴りで粉砕するなんて、すごいね」

「逆に怖いよ」

「じゃあ2階に行こうか」

2階 通路A

「あっルールが張ってあるよ」

「ルール2

このゲームには、立ち入り禁止の場所が存在する。
以下のことをした場合、罰を与える

- ・封鎖された場所に入る。

尚、元々立ち入り禁止の場所もあり、そこに入った場合も罰を与える。」

「なるほど。じゃあ、1階は、立ち入り禁止って訳だな！」

「深夏、こんな状況なのになんで元気なのよ」

「会長さん、お姉ちゃんは逆に楽しんでるような気がします」

「なあ杉崎、たしかエレメンタルブレードだろ、何か出来ないのか」

「何をだ？ヨシタカ」

「だから、小説とかで剣が光ったり剣の先からレーザーが出たりするじゃん。

エレメンタルだから、他の事も出来ないかな」

「じゃあ、やってみよう」

そこに、ヤンキーみたいな、集団がやって来た。

「おい、そこのお前ら。俺達の脱出のために死んでもらおうか」

「よし、こいつらで試してみよう」

「氷の精霊よ、我に力を分け与え、絶対零度の氷で凍らせよ。
ブリザード・クライシス」

杉崎達は驚愕した。まさかほんとに出るとは、思わなかったのだ。

とがった氷がたくさん飛んでいく。

「このままじゃ死んじまうな。氷の精霊さまお願いだから止めて下さい」

「剣に向かって土下座かよ」

氷が止まった。

不良集団A（勝手に命名）は、怯えて逃げていった。

「つまり、これは自然の力が使えるんだな。かけ」

「また、お姉ちゃんのテンションがあがってますう」

「ところで、よく君。これからどこに行くの？」

「とりあえず、上の階に行こう。そして主催者に会う」

「分かったわ」

「おい、あれを見る。5人くらいが、こっちに向かって来てるぞ」

「今気づいたんだが私って影薄くね」

「真儀瑠先生、居たんですか!？」

「居たよ! シクシク」

「先生のキャラが崩壊して行く」

「五月蠅いぞお前ら」

やって来た人達のうち、1人が話しかけてきた。

「私、ハ平沢 唯。貴方は？」

「俺はハ暁 ヨシタカだ」

10分後……

すっかり、打ち解けてましたとき。

一同は、歩き始めた。

2階 宝具の間

「あっあんなに人が居る」

「これじゃ行けないな」

「杉崎、津波だ！」

「OK！」

「どうゆう事、ですか知弦さん？」

澪は一番信頼できそうな、知弦に話しかけた。

「あの剣の力で何かしようとしてるのよ。剣の力と言うのは……」

説明中……

「水の精霊よ、我に力を分け与え、大いなる水で全てを流せ。
ウォーター・ハザード」

大きな津波を引き起こし、そこに居る人を流した。

「よしOK」

「何気に酷くないですか？」

「気にしたら負けだぜ、梓」

「いやいや律先輩、流したら駄目でしょう」

「梓ちゃん、ヨシタカさん達が出会った、グレイよりはマシじゃないかしら」

「そうですね、ムギ先輩」

「宝具く欲しいく」

唯が一人で走っていった。

「あつ唯！」

今度は、大理石の上には銃が置いてあった。

そしてまた言葉が彫っており、

神極 チェンジ・マシンガン

「また、神極ね」

「もう次の階に行きましょう」

2階 階段A

「おい、お前らあ」

「あつあの時の、不良集団Aだ」

「何が不良集団Aだ！仕返しをしてやる」

「唯、あの剣に力が有ったんだから、それにもあるはず。チェンジだから実弾以外にも打てるんだよ。きっと。」

「分かったよ、ヨシタ力君。じゃあ、行くよ。閃光弾！」
スタングレネード

「ぎゃあ〜目が〜」

「よし、上に行くか」

3階 通路A

「あっルールだ」

「ルール3

宝具は、とても大切な物。

以下のことをした場合、罰を与える。

- ・宝具を壊す。

尚、敵の攻撃で壊れた場合は、罰は受けない。」

「次に進もう」

「ねえヨシタ力君、その首からぶら下げている、ロザリオ十字架のペンダントほしいな」

「無理だ。これは、一度も外れた事が無いんだ」

「どうゆう事？」

「俺は、能力者と呼ばれている、ヴァンパイア吸血鬼の血が体を流れているんだ。俺が昔、死にそうになった時、ヴァンパイア吸血鬼が、自分の治癒能力の高い血を注入して、助けてくれたんだ。

で、俺もヴァンパイア吸血鬼に成っちゃったんだ。

その人が、ヴァンパイア吸血鬼が苦手な、十字架を付けてくれて、こう言ったんだ。

【それが付いてる間は、普通の人間で居られるよ】
ってね。

それから、外れた事が無い」

「ええっヨシタ力君ってヴァンパイア吸血鬼なんだ！？」

「あ、そうだよ」

みんなが驚愕していた。

「能力者か」。燃えるぜ」

「お姉ちゃん……」

3階 宝具の間

そこには、1人のおじさんが居た。

「この宝具、貴方達にあげます。私が待っていても意味がないと彫ってあったので。

じゃあさようなら」

おじさんはどこかに行った。

大理石の上には青い宝石みたいなのが、置いてあった。

彫ってある言葉は、

神極 ソウル・ストーン

この、宝具は能力者の封印をとき、力を強力にするものなので、普通の人が持っていてても意味はありません。

「また神極だわ。ごく稀なものに出すぎよ」

「この宝具は、ヨシタカのだね」

「そうだな、ヨシタカ以外が持っていても意味無いからな」

その時だった。

宝具がヨシタカの十字架ロザリオのクロスしているところにくつついた。

「えっ、くつついちゃったよ」

「なんだか、今までの何百倍も力が出るぞ」

「封印が解けたって事じゃ」

「もしかして、血を吸われちゃう?」

「大丈夫、あれは元々吸血鬼ヴァンパイアの人がする事だから」

「なら良かった」

「じゃあ、次の階に行くか」

「うん。行こう！」

だが、次の階で悲劇が起こることなど誰も知らなかった……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二章 神極（後書き）

今日は頑張りました。

第三章 悲劇（前書き）

今回は、若干、R15です。

第三章 悲劇

4階 通路A

「ルールだ」

「ルール4

このゲームでは、人を殺しても構わない。
だが、戦闘をしては、駄目なエリアがある。
以下のことをした場合、罰を与える。

- ・戦闘禁止エリアで戦闘をする。

尚、正当防衛は罰は受けない」

「酷い」

「殺しても良いなんて」

「今は、それを言っている場合じゃないぞ。急ごつ」

「メールが来たぞ。」

「これは、特定の人達だけに送っています。

神極が、こんな有ることを驚いている人が居ると思います。
神極は1階から、ある特定の階までに有るのです。

だから、今皆さんがたくさん神極を持っていてもおかしくはありま

せん。

ではDEATH GAME再開！」

4階 宝具の間

「あつ、あいつは……」

「グレイ！」

そこには、グレイが居て、指輪形の宝具を持っていた。

「よお、ヨシタカ。元気か」

「よくも、あの時は……」

「血の気が多いねえ、鍵。

この宝具は、【神極 デーモンズ・リング】
悪魔と契約する事で悪魔を下僕に出来るんだ」

「そんな！ 悪魔など存在するはずが無い」

「ふつ、じゃあ見せてやるよ。悪魔をなあ。

漆黒に染まりし悪魔よ。今、俺の魂を捧げ、汝に絶対の忠誠を誓う。

今ここに降臨せよ。」

すると、指輪が黒く光り、グレイの横に黒い悪魔が立っていた。

「主、ご命令を」

「そうだな。愚かなる者に罰を与えるのだ」

「了解」

悪魔がこっちに向かってきた。

「杉崎！唯！」

「ああ、分かってるさ。」

炎の精霊よ、我に力を分け与え、地獄の業火で焼き尽くせ。
ヘル・フレイム」

「実弾装填。いっけー」

「死ね。ダーク・ジェノサイド・カッター」

悪魔が、鎌を振ると、鎌状の闇の衝撃波が、無数も飛び交う。

杉崎の炎や、唯の銃撃は、跳ね返され、ダーク・ジェノサイド・カッターが皆を襲う。

「皆無事か！」

会長が叫ぶ

「私や知弦、真冬ちゃんと、梓ちゃんは無事よ。けど……」

悲劇だった

深夏は、左肩を切断され、大量の血が溢れ出ていた。

真儀瑠先生は、腹の半分が切り刻まれ、内臓がはみ出していた。

澪は、頭蓋骨が割れて、脳が丸出しになっていた。

律は、背中が斜めに裂けていた。

ムギは、右足が無くなっていた。

ヨシタ力は、怒りに足が震えた。

「曉式暗殺術「瞬」」

ヨシタ力は、一瞬で悪魔の前に移動した。

「曉式暗殺術「破」」

ヨシタ力は、手のひらを、悪魔に向けた。

と、次の瞬間、悪魔が爆発した。

「あれが、ヴァンパイアの力！？」

「へえ、なかなかやるじゃん。まあ今日はこれだけで良い。行くぞ。最後に名前ぐらい教えてやれよ」

「我の名は、デッド・バーサークだ」

「じゃあな」

グレイは通路に消えていった。

「深夏、真儀瑠先生……」

「澪ちゃん、りっちゃん、ムギちゃん……」

ヨシタ力は、ある行動に出た。

「ヨシタ力君。こんな時に携帯使って何してるの？」

「メールを送ってるんだ。こんなメール」

「主催者、お願いだ。皆を助けてくれ。
俺の命と引き換えでも良いから。」

「あの送られてきた、メールのアドレスに送った」

返事が来た。

「ふはははは」

面白い人間だ。 暁ヨシタ力。

前にもこのメールアドレスに気づき、このようなメールを送ってきた奴が居たな。

良いだろう。だが条件がある。

その怪我をしている奴は、我が治療をし、完治させる。

そして、今とは別の場所から、改めてゲームを始めてもらう。

そして暁ヨシタ力達、真儀瑠紗鳥達、どちらかのメンバーが、一人でも死んだら、全員に罰を与える。

ちなみに前、同じ事をした奴らは死んだぞ。

選択するんだな」

「皆、良いよな」

『うん』

「だけど、ヨシタ力君。2度と俺の命と引き換えでも良いからなんて言わないで。

ヨシタ力君の大切な命なんだから」

「分かった。ありがとな唯。じゃあ、OKと、メールを送るぞ」

メールが届いたら、負傷している者の下の床が開き、落ちていった。

「残ったのは、7人か……」

ヨシタカが、呟いていると、ゴゴゴゴと地響きがした。
すると、天井から壁が落ちてきた。

「罠か！」

「皆、避ける！」

通路は壁で塞がり、チームが2つに分かれた。

チームA ヨシタカ、真冬、唯

チームB 杉崎、会長、知弦、梓

「皆、無事か」

「ああ、こっちは、無事だ」

「よーくん、とりあえず、このまま分かれて進みましょう」

「はい。後で必ず会いましょう」

今までのチームは、3つに分かれてしまった。
最上階まで、無事たどり着けるのか？

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第三章 悲劇（後書き）

暁式暗殺術「破」

暁家秘伝の奥義。

電子レンジの様にマイクロ波で人体の血液や水分を沸騰させて爆発させる。

この技をくらった者は、ほぼ死ぬだろう。

暁式暗殺術「瞬」

暁家秘伝の奥義

様々な限界を突破し、光りの速さで移動する。

この動きについて来られる人は居ない。

第四章 A n g e l B e a t s ! (前書き)

別の視点からの話です。
とても短いです。

第四章 Angel Beats!

「痛ててて。ここはどこだ？俺は卒業式を終えて、転生したはず。こんな中途半端な状態から、始まるわけないし、死んだ世界戦線の記憶があるのもおかしい」

彼は「音無結弦」ただの青年だ。

「ちょっと外に出てみるか」

音無の部屋の近くには、4つの部屋が有り、中には卒業式の際のメンバー、

ゆり、かなで、日向、直井が居た。

音無は、4人を自分の部屋に連れてきて、携帯を読んだ。

「こんな事、ありえるはずが無い」

「いや、あの世界が存在したぐらいだから、ありえるかも……」

「てゆうか、あの世界からここに來た事が問題だろ」

皆で相談していた時、遠くから悲鳴が聞こえた。

「ぎiiiiiiiiiiあー。誰か助けてくれー」

「行ってみましょう！」

そこに居た人は、もう帰らぬ人となっていた。

そこに居たのは、頭部と体が離れている死体だった

第1章で、登場した、へ出目川 太志^{マサ}だった。ヨシタカとは、時間差が有ったので、会わなかった。

「これは、酷い……」

「どうやら、死んだ世界戦線の時と同じ記憶があるから、死なないと思ってたけど、違うようだな」

「メールが送られてきたわ」

第一章のメールです。

「結弦、私はとりあえず、上の階まで行ったほうが良いと思う」

「じゃあ行くか」

上に行こうとした時、ゆりが喋りだした。

「ねえ、新しい戦線の名前考えない？」

「良いと思うぞ」

日向が賛成する。

「考えてみた。」

N……直井は

C……神だ

S……戦線」

「駄目に決まってるじゃない」

「じゃあこんなのはどうか？」

M……また

O……同じメンバーだよ

S……戦線」

「いい所行ってるんだけどね。駄目」

日向も駄目だった。

「じゃあ、これで、

S……死んだら

S……死んじゃうよ
S……戦線

この世界では、死んだら本当に死んじゃうという、意味を込めたんだけど」

「じゃあこれで決まりね」

音無達はどんどん上に上って行った。

10階 通路E

かなり、急いで上り、音無達は、もう10階まで来ていた。

音無は、そこである人間を見つけ、大声で叫ぶ。

「あれ、ユイじゃないか！」

「本当だ……」

ユイは、泣いていた。

「どうしたんだ」

「皆さん、生きてたんですね。皆さん以外の戦線メンバーで、行動

していたんです。

そしたら、この10回で、3つの首を持つ大犬が現れて、皆を食べたんです。

私は、逃げてきました」

「ケルベロス……あんな化け物が存在しているなんて……」

ユイはそこに泣き崩れていた。

「日向、出番だぞ」

「えっ？」

「お前、婚約者を慰めてやる事も出来ないのか……」

「分かったよ。やりやあ良いんだろ。ユイ、俺の目を見る。

お前は、化け物から逃げてきたんだ。他のみんなの分も生きなきゃいけない。
泣くな！」

日向は、優しく次の言葉を話し始めた。

「安心しろ。次、また出たら、俺が守ってやんよ」

こうして日向は恥ずかしい、慰め方をしたのであった。

ユイは、S……死んだら　　に加わりSSSは、6人になった。

S……死んじゃうよ

S……戦線

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第四章 Angel Beats!（後書き）

ちなみに、ヨシタカが言っていた奏と、かなでは、別人です。

読んでみた感想を聞きたいです。
ぜひ、感想を書いてみてください。

番外編 オールナイト全時空・D！（前書き）

番外編です。

本編とはまったく関係ありません。

番外編 オールナイト全時空・D！

「ゲストを招いてこそその番外編、番外編があつてこそその本編なのよ！」

会長がいつものように小さな胸を張ってなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた。

「会長、なんで俺達生徒会室に居るんですか！」

「それが番外編トリック！」

「なんなんですか！しかもヨシタカが居るし！」

「どもどもヨシタカです」

「で、番外編をやる事になったのよ」

「で、なぜ生徒会室？」

「それはもちろん……これだあ！」

というわけで。

会長「桜野くりむのオールナイト全時空・D！」

杉崎「ネットでもやるんですねえ！」

会長「オープニングは、ヨシタカと、杉崎のデュエットでTree
sure2010だよ」

杉崎「何故えええ！」

ヨシタカ「早く歌うぞ、杉崎！」

杉崎「なんでそんなにノリノリなおおお！」

♪ オープニングBGM ♪

会長「さあみんな、今日もやるわよ！」

杉崎以外「おおー」

杉崎「相変わらずラジオでは、俺だけアウェー！」

知弦「アカちゃん、よくんにラジオの説明は良いの？」

会長「始める前に、ばっちり全部読ませたわ！」

深夏「準備しすぎだろ！」

真冬「もう完璧に、あのDEATH GAMEムー드가どこに行
ってしまいました！」

杉崎「DはDEATH GAMEのDですか？」

会長「デステニーのDだよ！」

杉崎「デステニーの意味は、運命ですよ」

会長「……」

深夏「絶対に、なんかかつこいいからという理由で使ったな」

真冬「まあ、デステニーでも、需要はありますけどね。運命で導かれた参加者とか」

知弦「でも、小説的には、DEATH GAMEのDの方が良かったけどね」

会長「……よし、『ころけん』行ってみよう」

杉崎「話を逸らした！そしてその逸らし方はやめてえ！」

会長「ラジオネーム《DEATH GAMEの参加者》さんのお便り」

杉崎「無視しないで下さい！そして、どうやってお便りが届いた！？」

会長「それが番外編トリック！」

杉崎「それは、もう良いですから！」

会長「『生徒会の皆さん、こんばんはー』」

杉崎以外『こんぱっぱー』

杉崎「ヨシタカも、そっち側かぁ！」

会長「『こんな、意味不明なゲームに巻き込まれて、大変なので、同じく参加してる杉崎を殺して、気を落ち着かせようと思います』」

杉崎「ひでえ！ 主催者を殺せよ！」

知弦「番外編でも、DEATH GAMEの被害にあってるわねキ
ー君」

杉崎「もうやだぁ、このコーナー、ほんとにやだぁ！」

会長「じゃあ、辞めて、DEATH GAMEに戻る？」

杉崎「嫌だぁ！ どっちも嫌だぁ！」

会長「杉崎が泣きついてきたので、次のコーナーに進むよ！
次のコーナーは、ヨシタカ&私の人生相談！」

杉崎「相変わらず、自分のコーナーだけ楽ですねえ！」

知弦「これが、アカちゃんクオリティ！」

杉崎「とても、懐かしい言葉ですねえ！」

会長「ラジオネーム《人生バラ色》さんのお便り」

杉崎「人生相談するまでも無くなー!」

会長「『生徒会の皆さん、こんばんはー』」

杉崎以外「こんばんはー」

杉崎「やっぱり、やるんですねえ!」

会長「『僕は今まで大金持ちで裕福な暮らしをしていました。だけど、今は父の会社が倒産して、ホームレスになり、公園で、ダンボールを食べる毎日です。生徒会の皆さん、どうにかありませんか?』」

ヨシタカ「ならない。貴様は、一生ダンボールを食うんだ!」

杉崎「ひでえ! それは酷い!」

会長「そんな事言っちゃだめだよ。ヨシタカ!」

杉崎「会長!」

会長「食べるダンボールも無くなって、そのうち自分を食うようになるよ!」

だから一生ダンボールじゃないよ」

杉崎「どうして、リスナーに厳しいんですか、このラジオは!」

ヨシタカ「DEATH GAMEをやってるから、そんな心配して

る暇ねえし！」

会長「関係ない人だし！」

杉崎「本気でリスナーが可哀想だよ！」

会長「さて、次。はい、耳栓」

真冬「またですか……」

深夏「嫌な予感しかないんだよな、これ」

会長「と、いうことで、定例の姉妹いじめ、《定められた一言》レ
ツツゴー」

杉崎「またですか。オールナイト全時空・Rのときは汎用性無かつ
たですから、
汎用性が有るのにして下さいよ」

会長「うん！　ちなみに、ヨシタカも今日はやるよ」

知弦「てゆうかキー君。定例の姉妹いじめを可哀想だとは言わない
のね」

杉崎「もう慣れてしまいました！」

知弦「……」

会長「今回は、杉崎が『真冬ちゃん、やらないか!』で知弦が『その方向性は無しで、行くわ』で、ヨシタ力が『もう、やっちゃって良くね!』だよ」

杉崎&知弦「……………」

ヨシタ力「はあ……………」

会長「返事!」

杉崎&知弦&ヨシタ力「……………はい」

会長「では、姉妹の背中をトン、トン、トンっと」

深夏&真冬「……………」

会長「ちゃんと喋ってよ!じゃあ開始!」

深夏「なあ真冬、もう二人だけで話さないか?」

真冬「そうだね。賛成だよ」

知弦「その方向性は無しで、行くわ」

深夏「なんで!? まあ、2人だけで話すのは良くないかもしれないけど、方向性まで否定しなくても!」

杉崎「真冬ちゃん、やらないか!」

真冬「はう。いきなり、セクハラされました」

深夏「鍵、よくも妹に手を……」

ヨシタカ「もう、やっちゃって良くね！」

深夏「ヨシタカまで今日は変態か！」

知弦「その方向性は無しで、行くわ」

深夏「人の事を思うだけでも駄目なのか！」

ヨシタカ「もう、やっちゃって良くね！」

深夏「その《想う》じゃねえから！」

杉崎「真冬ちゃん、やらないか！」

真冬「またです。何回やるつもりですか」

杉崎「真冬ちゃん、やらないか！」

真冬「その《やる》じゃありません！」

ヨシタカ「もう、やっちゃって良くね！」

深夏＆真冬「だから、嫌だって（です）」

知弦「その方向性は無しで、行くわ」

真冬「否定するのも駄目なんですか！」

知弦「その方向性は無しで、行くわ」

真冬「どっちなんですか！もう真冬、先輩たちのことがわかりません……」

杉崎「真冬ちゃん、やらないか！」

ヨシタカ「もう、やっちゃって良くな！」

真冬「もう良いですよ！勝手にやれば良いじゃないですか！」

深夏「妹が落ちた。理解できねえ！」

知弦「その方向性は無しで、行くわ」

深夏「理解しなきゃいけないのかよ！」

真冬「もう真冬達どうなるんですか！教えて下さい！」

知弦「その方向性は無しで、行くわ」

姉妹「ふぎゃーーーーー」

会長「今日もすごいわね。この壊しっぷり」

杉崎「会長、やらないか！」

会長「やらないよ!!!」

姉妹「にゃー」

会長「姉妹が戻った所で、ED曲、椎名姉妹のデュエットでGO！
GO！MANIACだよ」

ヨシタカ「それは色々まずい様な気がする！」

♪ エンディングBGM ♪

会長「じゃあ締めは、ヨシタカと深夏と杉崎お願い！」

深夏「この3人で何すんだ？」

ヨシタカ「こうするんだ！」

杉崎「ああつヨシタカが深夏の耳たぶを舐めている！」

深夏「ああっん……あ、ちよっ、ひゃふっ、ひあっ！」

杉崎「深夏の性感帯は、耳たぶと。メモメモ」

深夏「メモるなあん」

こうして、深夜まで深夏は弄ばれたとき。

本日の生徒会終了！

番外編 オールナイト全時空・D！（後書き）

どうでしたか。ぜひ感想をお願いします。

第五章 洗脳（前書き）

また、グレイが出ます。

第五章 洗脳

5階 通路A

チームAは、5階まで来ていた。

「ルールだ！」

「ルール5

このゲームを脱出すると、賞金100無量大数が与えられる。
だが、人を殺して金を奪うのは駄目。
以下の事をした場合、罰を与える。

・人を金銭目的で殺す。

尚、賞金は脱出した人全員で山分けされる。」

「無量大数って、一番大きい単位だよね！」

「ああ、しかも、金が目当てで脱出する奴は、少しでも賞金を大きくしたいから、人をたくさん殺す」

「そして、それも金銭目的で殺したとなり、死ぬんですね」

「今は、他の人の事を心配してられない！行くよ」

5階 宝具の間

「また会ったな！」

「貴様ッ！」

そこに居たのはグレイだった。

「唯！」

「小型ミサイル発射準備OKだよ！」

グレイは、不敵に笑う。

「へえ、その銃からミサイルも出るんだ！
そして、その攻撃は止めてもらおうか！
こいつを見ても、続けるか？ヨシタカ」

グレイは後ろから、1人の少女を前に出した。

「奏ッ」

「奏って、ヨシタカさんが言っていた人ですか？」

「ははは！ 悪魔って便利だよなあ。洗脳も出来るんだぜ。
奏、やっちまいな！ その【神極 クロスボウ・スピアー】でな！」

奏の手にはクロスボウが有った。

奏は、真冬に向かって撃った。

「真冬ちゃん、危ない！」

ヨシタカが真冬を抱きかかえ、倒れこんだ。

《ズキュリ》

鈍い音がした。

「ぐあああ！」

ヨシタカの腰には、クロスボウの矢が刺さっていた。

「【神極 クロスボウ・スピアー】は、矢がとても鋭い。痛いだろう！」

そう、 그레이が話している時、奏が手を掲げた。

「唯、スタングレネード閃光弾を 그레이に撃つんだ。早く！」

唯が閃光弾スタングレネードを撃った次の瞬間、 그레이の周りが爆発した。

「これって、どうゆう事？」

「奏も能力者なんだ。光をレーザーに変える【光線】のな。光が有るところなら、どこでも使える。」

さっき、俺達に撃とうとしたから、閃光弾で、スタングレネード大量の光を、 그레이に当て、
そっちを爆発させたんだ」

「じゃあ、閃光弾スタングレネードがあれば大丈夫だね」

「違うな。下手すれば、あの光全てをレーザーに変え、こっちに撃ってくる。だから、あまり良い作戦とは言えない。それよりも、この矢を引き抜いてくれ」

「分かったよ」

矢を抜くと、大量の血が出て来た。だが、数十秒後、傷は塞がった。

「これが治癒能力なんだ……」

「ヨシタカ先輩！ 真冬を守ってくれてありがとうございます」

「どういたしまして」

「そんな気楽な会話をしていられるのはここまでだ！ こっちにはこいつが居るんだぞ！」

煙から、グレイが出てきて、奏を掴む。

「俺はお前を倒し、奏を取り戻す！」

杉崎視点

10階 通路F

「もう10階だな」

「長かったわね」

「疲れました!」

「知弦くお腹減った」

と、和んでいる一行に、獰猛な鳴き声が聞こえてくる。

「グオオオオオオオ」

そして通路に、1匹の動物が現れる。

その動物は、ライオンの頭と山羊の胴体、蛇の尻尾を持っていた

「そんな……キマイラは、神話の生き物。なぜここに!」

そこに居たのはキマイラだった。

「拙いわ!神話のキマイラは、火炎を吐く」

キマイラは、知弦の言ったとおり、火炎を吐いた。

「俺が行きます！」

雷の精霊よ、我に力を分け与え、轟く雷撃で、敵を打ち碎け。
サンダー・ボルト」

だが、火炎とぶつかり、お互いの威力は相殺された。
さらに、キマイラは火炎を吐こうとしていた。

「負けてたまるかあああ」

ヨシタカと杉崎は仲間を救えるのか……

t o b e c o n t i n u e d

第五章 洗脳（後書き）

ぜひ感想をください。

第六章 覚醒する魂！——ヨシタカ！（前書き）

超展開です。

第六章 覚醒する魂！——ヨシタカ！

ヨシタカ視点

「俺はお前を倒し、奏を取り戻す！」

「やれるのかよ！ こっちにはコイツが居る！」

さあ！ 【神極 クロスボウ・スピアー】の本当の力見せてやれ！」

「【神極 クロスボウ・スピアー】ミラージュバージョン」

【神極 クロスボウ・スピアー】から1本の矢が出た。

だが、ヨシタカの前で、矢が1本から30本ほどに増えた。

「なんで、矢が増えてるんだ！」

「これが、【神極 クロスボウ・スピアー】の力！ 無数の矢は、誰も避けられない！」

「そんなの、大丈夫！」

唯が矢を、全て打ち落とした。

「唯さん、すごいです！ 男同士の絡みよりすごい実力です！」

「若干、余分な文が……」

バン！バン！バン！

こうしている間にも、唯の攻撃は続く。

「ヨシタカ君！ 足を撃ったから、今のうちに！」

「おう！ 暁式暗殺術「瞬」」

ヨシタカは、奏の前に姿を現した。だが……

「ふっデッド！ ブラックバーニング！」

漆黒の炎が、デッドから放たれる！

「（俺は何も守れずに終わるのか……そんなの嫌だ！ 絶対に仲間を救うんだあ！）」

その時、ヨシタカに赤い光が降りかかってきた。

そして、ヨシタカの目は真紅に染まり、髪は蒼に変わった。強い意志が宿ったように見えた。

「ヨシタカ君！」

「俺は、皆を守る！ 暁式召喚術「龍」」

ヨシタカがそう唱えると、床に魔法陣が現れた

「神の裁きの力を持つ龍よ！ 今、天より現れ、死の罰を下せ！ 降臨せよ。神龍——ラグナロク！」

ヨシタカが言い終わると、魔方陣から巨大な龍が現れた。

「ジャッジメント・ソウル！」

その龍は、極太レーザーを放出した！

「あれは、神話に登場する龍神！逃げるぞデッド！」

グレイは奏を抱え、デッドと共に脱出した。

レーザーは、壁を貫き、崩壊させた。

ヨシタカは、倒れた。

「ヨ…タ…先…、ヨ…タ…先…！」

「…シ…カ君、…シ…カ君！」

ヨシタカは、自分と呼ぶ声に目を覚ました。

「ヨシタカ君！」

唯が寝ているヨシタカに、飛び乗っていた。
そして、梓にするように、頬をこすり合わせた。

「ちょ、唯！」

「ヨシタ先輩！」

真冬は、対抗するように反対側の頬に自分の頬をこすり合わせていた。

「真冬ちゃん！？」「

心配したんだよ！」

「それよりも、あの力なんですか！」

ヨシタ力は、まだ、覚醒状態（仮）だ。

「それは、私が説明しましょう」

龍が話し始めた。

「皆様には、《ソウル》と呼ばれる物質が体内にあります。

それは、何かを守りたいと、思う気持ちに、反応するのです。

ヨシタ力は、その思いが爆発して、あのような、体になられたのでしょうか。

私は神龍——ラグナロク。

ヨシタ力は、あの瞬間、自分の力を取り戻し、私を召喚したのです」

「自分の力って？」

「詳しくは、お話できませんが、ヨシタ力様は、神々の頂点^{トップ}に立つ龍神なのです」

「ええっヨシタ力が神!？」

「ええ」

皆が驚愕しているとき、かなり上の階から、強い思いがヨシタ力に聞こえた。

「言ってる。負けてたまるかあああ　って。行かなきゃ!」

「え!？」

「たぶん、《ソウル》が爆発しようとしています。急いで向かいましょう!」

「だけど、どうやって!」

「私の背中に乗ってください」

3人は、ラグナロクに乗った。

「行きます!」

ラグナロクは天井を破り、上昇していった。

杉崎視点

心の中から、熱い何かが、こみ上げてきた。
そして、それが爆発しようとした時……

バン！

音が、後ろから聞こえ、振り返ると巨大な龍が存在していた。

「ジャッジメント・ソウル！」

すると、極太レーザーが、キマイラを襲い、消滅した。

「待たせたな！」

そこに居たのは、真紅の瞳に蒼い髪のヨシタ力だった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第六章 覚醒する魂！——ヨシタカ！（後書き）

ルール6から10は、秘密です。

第七章 仲間達の帰還（前書き）

遅くなりました。

今回は違う人視点です。

第七章 仲間達の帰還

深夏視点

あたしは、あの悪魔に、攻撃された後、意識を失った。

「いててて……」

あたしは、皆とは違う場所で目を覚ました。

「うーん」

横で声が聞こえた。

「深夏？」

横に居たのは、澪だった。

「澪か。ここは、どこなんだ」

「皆とは違う場所だと思う」

「とりあえず、上に、行ってみつか」

数時間後

あたし達はひたすら上の階に向かった。

澪と数時間一緒に居て、気づいた事が1つある。

澪は極度の怖がりだ。

あたしの腕にずっとつかまって震えてる。

ちなみに、武器が置いてある部屋を途中で見つけ、銃を手にして
いる。

グオオオオオ

何かの叫び声でした。

「行ってみよう」

キヨン視点

まったく、ここに来てからろくな事が無い。

長門の情報操作は通じないし、古泉の機関との連絡も取れない。
朝比奈さんは、珍しく、自らの意思でTPDDの無許可の使用を試みるが、タイムスリップは出来なかった。

ハルヒは、ものすごく不機嫌だしな。

しかも、今、目の前に、伝説の生き物の、バジリスクが、存在している。

本当にろくな事が無いな。

「ハルヒ！逃げるぞ！」

「嫌よ！せつかく、こんなめつたに会えない生き物が、せつかく目の前にいるのに、
逃げるなんてことしない！」

「今は、そんな事言ってる場合じゃないだろ！」

「きゃあ！」

朝比奈さんが悲鳴を上げた。

「どうしたんですか」

「もう、生きていない。バジリスクは、人を、睨むだけで命を奪う力がある」

「っ……」

「嘘よ！みくるちゃんには死にはしないわ！」

ハルヒは、朝比奈さんに駆け寄る。

このゲーム中に、たくさんの人の死を見て来たが、仲間が……

「ねえ、声を出してよ」

ハルヒは、擦れた声で話しかける。

「ぐぎゃあ」

バジリスクが襲い掛かってくる。

「長門っ」

長門なら大丈夫かと思った。だが……視界を封じられたら、抵抗の使用が無かった。

「有希っ」

ハルヒが駆け寄る。

「ぐぎゃあー」

バジリスクが次は古泉に襲い掛かる。

「古泉ー！」

「はい、分かってます」

古泉は、手に入れた武器の長槍を振りかざす。

ドスッ

槍が刺さった。だが……

「うわああああ」

なぜか、古泉は倒れていた。

長門が、もう無い力を振り絞って話す。

「バ、ジリス、クを槍で、刺す、と、毒が、槍、から、伝わり、死ぬ……」

長門は息をひきとった。

この5分間で、3人の、未来人、宇宙人、超能力者が死んだ。
俺は、見てることしか出来なかった。

「ハルヒっ！行くぞ！」

「嫌っ！！！皆を置いていくことなんて出来ない」

「このままだと、俺達も死んじゃう。早く……」

「グオオオオオ」

話してる途中、後ろからバジリスクが襲ってきた。

「（もうだめか……）」

バン！

諦めたその時、銃声がした……

深夏視点

巨大な蛇が、人を、襲おうとしていた。
すぐに銃を構え、撃った。

バン！

「零！背後から、援護してくれ」

「分かった」

バン！バン！バン！

零が援護射撃をしてくれている。
その間にあたしは蛇のところまで行く。

「おりゃあ！」

力任せに殴る。

そして、弱ったところを、銃で止めを刺した。

数時間後

あたしと、澪は、キヨンと一緒にハルヒを落ち着かせた。
キヨンの話によると、仲間を3人も殺されたらしい。
とりあえず、この2人と行動を共にする事にした。

数分後

ハルヒは、少し笑顔を取り戻していた。

コツコツコツコツ

足音が聞こえる。

「敵かつ？」

銃を構える。

向こうもこっちに気づいたようだ。

「零、深夏！」

「律！それに皆」

向こう側からやって来たのは、律、むぎ、真儀瑠先生、知らない人6名だった。

「そっちの人は誰だ？」

「えっとね、私達と、一緒に行動してる、SSSのメンバーなの」

「んじゃ、そっちの人は？」

「この2人は、ハルヒとキョンだ。一緒に行動してる」

「今、あっちからヨシタカの声が聞こえた気がするんだ」

「じゃあ、行つて見るか」

「相変わらず、真儀瑠先生は空気ですね」

「シクシク」

カチッ

数歩歩くと、漣が何かを踏んだようだ。

ゴオオオッ

「トラップだ！」

SSSの日向が叫ぶ。

上から、鉄の柵が落ちてきた。

「危ないっ！！！」

漣は、柵の落とされる場所に居たので、皆とは別のほうに、抱きかかえ、転がる。

「大丈夫か！」

「うん。ありがと深夏」

すると柵の向こう側から律の声が聞こえる。

「深夏、漣。ハルヒさんとキョンさんはこっちが、預かるから、そっちは、そのまま進んでくれ」

「ああ！必ずまた会おうな！」

ハルヒ、キヨン、律、むぎ、真儀瑠先生、SSSと分かれてから、数十メートル歩いた。
すると大きな場所に出た。

「ジャッジメント・ソウル！」

そこには、キマイラと戦っている、真紅の瞳に蒼い髪のヨシタカだった。

t o b e c o n t i n u e d

第七章 仲間達の帰還（後書き）

分かりにくいですが、深夏と澪が皆の所に来たと言うことです。

第八章 強き思いと願い！（前書き）

遅くなつてすみません。

第八章 強き思いと願い！

「ジャツジメント・ソウル！」

すると、極太レーザーが、キマイラを襲い、消滅した。

「待たせたな！」

そこに居たのは、真紅の瞳に蒼い髪のヨシタカだった。

……

キマイラを倒し、通常バージョンに戻っているヨシタカの目には、深夏と澪が見えた。

『ヨシタカ君っ（ヨシタカ！）』

後ろから、真っ先に唯と杉崎が向かってくる。

そして、ワンテンポ遅れて皆もやってくる。

「ヨシタカ様。私は、少しお邪魔のようですので、戻っていますね」

何故か、ラグナロクは、十字架に吸い込まれていった。
ロザリオ

そして、何故、そんな所には入れるのか聞こうとしたら、皆に揉みくちやにされた。

10分後

皆は落ち着いていった。

とりあえず、深夏と澪から事情を聞いた。

「じゃあ、りっちゃんとむぎちゃんは、その人達といるんだね」

「そのはずだ」

そしてラグナロクの事を話す。

「皆様、こんにちわ」

ラグナロクはロザリオから出て来た。

「何故、ロザリオから？」

「詳しい事は、神話の話になります。

龍神——ドラドーン、星神——ペガーン、感情神——クスーフエ

の、3大聖神と呼ばれる、神のトップに立つものたちがいます。

私は、その3神に仕える龍でございます。

そして、ある理由で、ヨシタ様は記憶を失い、人間として生きていたのです。

記憶を失う前のヨシタ様がいつでも一緒に居られる様にと、ロザリオに私の運搬機能を付けたのです」

「何故、俺は記憶を？」

「神には、聖神の力を持つ、光の神と、邪神の力を持つ、闇の神が存在します。

光の神は、龍神——ドラドーン、星神——ペガーン、感情神——クスーフエをリーダーにして、

3神で協力してまとめたのです。

闇の神は、邪皇帝——ロマノフ、破壊神——ジョーカー、破滅王——エースをリーダーにし、

その中でも、邪皇帝——ロマノフが魔王となり、事実上、一番偉いのは邪皇帝——ロマノフでした。

しかしある日、邪皇帝——ロマノフが亡くなりました。

そしてなぜか、このゲームを開催すると、破壊神——ジョーカー、破滅王——エースは言い出しました。

何故開こうとしたか、理由は分かりませんが、ヨシタ様は抵抗しました。

そして、記憶を失われ、今に至ります。

神を作り出した最古の神、魂の化身——ソウルという神がいます。
その神は、今眠りについています。そして、3大聖神達の魂も同様に、眠らされた。

いえ、封印されたといったほうが正しいですね」

「人じゃできないような事があると思ったけど、まさか神が相手だなんて……」

「神と戦えるの？」

「神に挑むには、神で対抗するしか、方法は無いです」

「でも、もしヨシタカが、元に戻ったとしても、1対2、状況が悪すぎます」

「なあ、まだまだ、あの部屋までは遠いんだから、今は体を休めようぜ」

「賛成だな。ただ、部屋が……」

「私の存在をお忘れですか？」

神に仕える龍ですから力があります。

バーチャルワールド
「今から仮想世界を作るので、そこで睡眠をとってください」

バーチャルワールド
仮想世界各自の部屋

（唯）

神かぁー。強いんだろな。

私も、力が欲しいな。

力があれば、皆を助けられるだろうし、この世界を抜けられる。
よし！ 決めたつ。今、神に願うよ。

……

（杉崎）

神……

俺は、俺のハーレムを守りたい。

俺は、何の力も無いただの男だ。

でも、仲間を大切な人達を大好きな人達を守りたい！

よし、決意したぜ。俺は願う！

……

（ヨシタカ）

俺は過去を知ってびっくりした。

でも、所詮過去の話。

今回はラグナロクが居てくれたおかげで、勝てたんだ。

俺には何の力も無い……

「悩んでいるんですね」

「ラグナロクっ！」

「ヨシタカ様、私は、何かを守りたいという気持ちが体をあさせたと言いました。

だから、何かを守りたいなら、願えばいいのです」

「願う？」

「そうです。守りたいと思う気持ちで願えば、きっと誰かは応えてくれます」

「ありがとうな」

「いえ。ではお休みなさい」

願いか……

じゃあ、願おう！
俺の願いは……

天界

「何故だ！」

破滅王——エースは怒っていた。
なぜなら、封印した、聖神の魂が居なくなっていたからだ。

「今すぐ探せ！」

「はっ！」

部下達は闇に消えていった。

数分前

『俺は（私は）！神の、皆を守る力が欲しい！』

地上から、強い思いが聞こえてきた。

そして封印は破れた。

その思いをここまで届けた者は、ヨシタカと杉崎と唯だった。

バーチャルワールド
仮想世界

もう、この世界の、強い思いを持った3人には、神の魂が降りてきていた。

t o b e c o n t i n u e d

次回予告

会長「な、な、な、なんと！次回は番外編だよ！」

杉崎「何で、5話ごとに、番外編やるんですか？」

ヨシタカ「良いじゃないか、たまには」

杉崎「たまにはじゃなくて、かなりやってるじゃないか！」

ヨシタカ「ゲームに参加してるよりは楽しいだろう」

杉崎「前回で言うと、ころけんさえ無ければねえええええええ！」

ヨシタカ「次回は何やるんだろうな？」

唯「次回は私も出るよ。お楽しみに」

ヨシタカ「感想待ってるぜ！」

第八章 強き思いと願い！（後書き）

次回は、遅くなるかもしれませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7134m/>

† DEATH GAME †

2010年10月17日03時56分発行